

い病名を調べることで終わつたよ
な気がします。先天性異常だけで、
分厚い本一冊分の病名があること

に、私はただ驚くばかりでした。

やつと子供たちの顔と名前が一致
し、一人一人の障害の内容が把握で
きるようになると、子供たちへの対

応にも余裕が持てるようになります。
「言葉」でのコミュニケーションは
うまくそれとも、身体全体で

意思表示をする子、自分なりに意味
を持たせた言葉で話をする子等。一
人一人違った表現方法があり、私自
身、頭を柔軟にしておかないととて
も子供たちについていけません。一
緒にいると教えられることが多く、
子供たちは私にとって先生のような
存在です。

こんなに素晴らしい子供たちなの
に、「障害者」というレッテルが付く
と、差別や偏見を持たれ、当り前の
社会生活が送れなくなります。

私自身、養護学校に勤務して初め
て、自分が障害者に対する差別や偏
見の目を向けていたことに気付きました。しかし、健常者の世界しか知ら
なければ相変わらずだったと思うの
です。実際に、自分の目で見て、触
れて生活する中で、「障害」は一つの
個性であり、私も子供たちも同じ人
間だと感じることができました。

無知、無関心をやめて、相手を知
ろうと努力し、関わりを持つようと積
みだと感じることができました。

極的に努めれば、言われのない差別
や偏見は、随分と減らすことができる
と思います。

本校でも、一昨年から、地域との交流
を深めようと、「おおすげ祭」というお
祭りを開催しています。自分の住む
町に養護学校があることも、そこで学
ぶ子供たちのことも知らなかつた
人が数多く来校して交流を持つこと
は、短い時間でもお互いを理解し合
うために有意義なことだと思います。

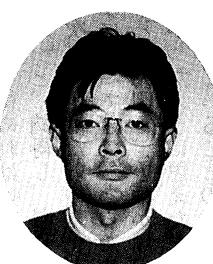
「障害児」と「健常児」の交流教育
も盛んになってきています。交流を
通して、健常児の障害者観を「かわ
いそ」だから助けてあげるではなく
く、「一緒に支えあって頑張ろう」に
変えて、二十一世紀には障害者に限
らず、現在の社会で差別・偏見を受
けている人達も皆、共生していくける
社会をつくっていきたいものです。

一九九六年の初日はとてもきれ
いでした。子供たちの未来が、初日の
ように美しく輝き、希望にあふれる
よう、一教師として今後も努力して
いきたいと思います。

(県立富岡養護学校養護教諭)

「文字」について 思つこと

兼 松 満 朗



私と書写との出会いは、今から三十年になります。当時は小学校一年生でした。

放課後を利用しての保護者同

伴の書写の習い事が学校で行われた
時のことです。周りの様子をうかが
い準備を始めたのですが、墨汁を用
いて墨をす正在するのは私だけでした。
しかも、文鎮も小筆もなく、親
が同席していなかつたのも私だけで
した。道具が完全にそろつていなく
ともみんなより上手に仕上げよう、
負けたくないという一心で書きまし
た。しかし、大筆の穂先をそろえて

書いた名前もじんで読めず、私の

ワープロやパソコンが普及した情
報化時代にある現在、学校において
も、子供たちが目にする文字の多く
は活字です。こうした状況は、社会
の必然的変化であり、対応していか
なければなりませんが、活字全盛の
今だからこそ、書かれた文字や肉筆
の文字のよさも見直してみる必要が
あるのではないかと感じます。

「文字は人なり」とか、「書は心画
なり」という言葉もあるように、
書かれた文字には、その人の人柄や
心が表れているのです。豊かな心
を育てる教育が叫ばれて久しいわけ
ですが、きれいな文字、のびやかな
この時の悔しさがばねとなり、そ
の後、文字に強い関心を持ち、書道
を続けてきました。